ホトトギス

十月号

ホトトギス
昭和二十年(一九四五)三月二十八日運輸省(特別機関)認可第六二七号
平成三十二年十月一日発行(第四十四巻第十号)

俳句随想〔三百五十二〕

汀　子

最近、季重りについての質問を受けることが度々ある。その度に私は次のようにお答えする。「出来れば初心者は一句に一つの季題を使った方がいいかも知れません。でも一つの季題を強調するために、或いは修飾するために他の季題を使っても一向に構わないのです。それは一つの季題を助けるために使うことになるからです」

有名な季重りの俳句がある。「目には青葉山ほとゝぎすはつ鰹　山口素堂」この季題は何であるか。「目には青葉の美しい季節になった。山では頻りにほとゝぎすが鳴きはじめた。さあ、初鰹の美味しい季節になりましたよ」とこのように解釈してこの季題は初鰹なのである。季重りが良くないと言う指導者は初心者に対してのみ散漫な俳句にならないように指導されるのであろう。短い詩である俳句は主の季題が働いて名句になる。一句が割れたりばらばらになって意味が散漫になってはならない。それを憂い季重りを避けようとする指導者もいるのだと思う。

今、私は「月」という句集を編むために、句帳の整理をしている。季重りも結構ある。しかし「月」を主題にする句を集めている。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

平成二十二年十月二日　芦屋ホトトギス会

鴫鳴いて結界のなき庭なりし
芒活けほほけるほかはなかりけり

十月三日　下萌句会

甘く見てあらぬ山路の霧となる
忽ちといふは山路の霧のこと
滞在の新米送りありしこと
山霧に囚はれの身となりにけり

十月四日　ロイヤル俳壇吟行会

霧込めて琵琶湖しづもりをりにけり
霧動きそめ湖晴れて行きにけり

十月七日　清交社

人の背の高さの通草なかりけり
きざはしを上り切つたる秋の風
六甲の全貌とらへ鳥渡る
爽やかに俯瞰三百六十度
秋冷を誘ふ水音なりしかな
正面の松の手入のはじまりぬ

十月八日　工業倶楽部

色鳥のとび立つ色を残さずに
今日までといふ快晴の秋高し
色鳥の来てゐる荘の句碑の辺に
担当の交代告ぐるそぞろ寒
又星を見にきざはしのそぞろ寒

十月九日　ホトトギス社吟行会

武蔵野の路地を迷ひぬそぞろ寒
駅前と聞きて迷ひて秋の雨
これよりの桜紅葉を描く園
出逢ひあり別れあり身に入む一日
露寒の雨の一日いとはずに

十月十二日　大阪倶楽部

横川路の野菊に心置きて発つ
九十九折とは野菊見て湖を見て
整然として鳥渡る夕かな
朝の間の一人の時間秋深し
スケジュール割込んで来し野菊晴
雨止んで露寒を身に纏ひたる

十月十二日　綿業倶楽部

さつきまでやゝ寒きことかこちをり
やゝ寒と思ひたるよりくつろがず
朝の間のやゝ寒失せてをりにけり
とともとのはぬ季節といへど稲の秋

十月十四日　西の虚子忌

横川路の紅葉を誘ふ山日和
半世紀横川の露を踏み分けて
紅葉とも薄紅葉とも着きにけり

十月十六日　九州ホトトギス同人会

鰯雲とて快晴の一部分
秋晴といふ旅心には回顧

十月十七日　九州ホトトギス同人会

しみじみとふり返りつつ灯下親し
秋灯を消し一と眠り二た眠り
思ひ出を繙けば秋深きこと
一泊の旅とは秋の深かりし

十月十七日　九州ホトトギス俳句大会

そよぐものより秋風の中にあり
旅心華やぎつつもそぞろ寒

十月二十日　夏潮句会

豊作といふ松茸を献立に
育てたき芝末枯れて行くばかり
露けしや仕事一劃崩しても
一つづつ予定過ぎゆく秋思かな
芒穂を解きぬ今宵は十三夜

十月二十一日　クラブ合同

これよりの花野に一歩又一歩
霧抜けて又霧抜けて又霧へ
命綱脱ぎて終りぬ松手入
十三夜うすうす所在ありしこと

十月二十二日　時雨会

秋の雨降りつのり来し夕べかな
やや寒を心地良しとも思へる日
稿債の半ば携へ旅の秋
やゝ寒をいつか忘れてをりしこと

十月二十三日　句会と講演の会

庭芝は養生中よ小鳥来る
快晴の秋へ編集会議終へ
かけもちの会議二ケ所の秋思かな
爽やかにありて処さねばならぬこと
刻々の予定こなしてゆく秋思

十月二十六日　年尾忌

露けしと思へばそれもなつかしく
年尾忌に親しむ心集ひけり
鈴成の榠樝に忌日みそなはせ

十月二十八日　きさらぎ会

目の前を過ぎゆく月日身に入みぬ
萩刈りし跡にひそめし命あり
定まらぬ陽気身に入む一日かな
大空を閉ざす雨雲身に入みて
やがて焚くつもりの萩を刈り置きぬ
つのる雨つのる身に入む心かな

十月三十日　中国ホトトギス同人会

十年の前の旅路も秋なりし
すれ違ふ台風進路交はらず
露けしや松陰のこと萩のこと
静けさにあれば露けき心添ふ
咲き残る萩と気づきて近づきぬ
秋惜む心に訪うて萩の町
台風の行方は追はず旅にあり

十月三十一日　中国ホトトギス俳句大会

杞陽さん偲べば萩の灯下親し
秋惜む心に偲ぶ人ありて
露けしと思へばいさぎよきことも
世の中を変へて露けく生くるとも
主義主張貫く若さ身に入みぬ

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年十月三日　野分会芦屋例会

遷都千三百年といふ秋思

とある日のとある佳人の秋思かな

もう止めませうと妻言ふ秋思かな

十月四日　はせを句会

秋声に東京タワー倒れさう

十月四日　カトリック新聞選者吟

曼珠沙華天与の風に色付きし

十月七日　蕉心会

昼の虫おのれも猫が恋しいか

水澄みて風に温度を預けゆく

うそ寒き角度に水尾の消えゆけり

天帝の気紛れは秋風にまで

萩咲いてカレーの匂ふ喫茶店

薄紅葉館の要として楚々と

水音に薄々紅葉揺れ初むる

みちのくの芸術的な茸かな

十月九日　ホトトギス社吟行会

一雨に秋声深く黙しをり

パステルに多摩を染め上げ秋黴雨

十月十三日　土筆会滋賀吟行

露の門潜りて親し幻住庵

幻住庵露けき広さありにけり

朝寒を発ちて近江といふ出会ひ

芭蕉の世露けく語る庵かな

俳聖を語り継ぐかに昼の虫

十月十四日　西の虚子忌

鰯雲忌日の空を引き絞り

山門に入るやや寒き足取りに

大道を継ぐ君の居て西虚子忌

十月十六、十七日　九州ホトトギス同人会、大会

佇めば句碑の裏より秋の風

除幕せし日を語る目の爽やかに

都府楼址てふやや寒き昔かな

そぞろ寒故人の名前聞くにつけ

秋灯を明るうせよと虚子の声

灯下親し佳人に注がれたる地酒

明日よりはホトトギス社も冬支度

十月十八日　朝日カルチャー若草句会

爽やかに江戸と筑紫を継ぐ鉄路

星飛んで地球を少し平らにす

初紅葉古の朱醸す寺

爽やかにホークス応援する佳人

十月十九日　草木瓜会

肌寒や阪神ファンといふ運命

実むらさき日本の色でありにけり

肌寒く来て肌寒く言ひ放つ

肌寒き聖堂ミサの鐘響く

式部の実零れて光失へり

十月二十一日　登高会

初紅葉横川に大いなる忌日

路地の風べつたら市の香を運ぶ

初紅葉新幹線は西に伸び

皇居より風を貰うて初紅葉

故郷に横川筑紫に初紅葉

十月二十三日　ホトトギス社句会

小鳥来る昔犬小屋ありし花圃

恋といふ一病と付き合ふ秋思

小鳥来る一羽道草してをりぬ

十月二十四日　野分会東京例会

砂浜に秋思の歩幅ありにけり

秋思の目宇宙の果てを見てをりぬ

稜線を啄木鳥丸く仕上げゆく

富士演習場啄木鳥か銃声か

十月二十五日　若水句会

去来忌や小さき小さきと墓詠まれ

浮塵子跳ぶ跳ぶ嫌はれてゐても跳ぶ

去来忌を身近にしたる一句かな

日本の色と甘さや吊し柿

人の世に生れて浮塵子といふ哀れ

十月二十六日　年尾忌

松手入忌日の寺の装ひに

添水鳴る忌日の空を仕上げつつ

阪神の優勝祈願年尾の忌

十月二十七日　目黒学園句会

秋惜む忌日の空でありにけり

叡山に忌心深め茸飯

毒茸のやうな一言放つ君

うそ寒を連れて山門潜る僧

秋惜む大いなる忌を二つ終へ

十月二十八日　「円虹」出句「ジパング」

明日といふ未来引き寄せ日脚伸ぶ

待春の茅渟海より明けて来し

六甲を背に風花は未来へと

三寒に祈り四温に踏み出せり

春隣俳句の未来故郷に

十月二十九日　ひまわり俳壇選者吟

室の花明日を約してをりにけり

十月三十、三十一日　中国ホトトギス同人会、大会

秋惜みつつ開国の世を偲び

うそ寒く松陰生家礎石のみ

台風とすれ違ひたる西の旅

冷やかな距離を保ちて墓並ぶ

結界としての山門やや寒し

蔦紅葉墓所彩つてをりにけり

乾杯を終へて忽ち河豚の宿

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

明易や四時随順の百余年　神戸　千原叡子
醤も亦龍野の誇風薫る　同
除幕の日語る住職句碑涼し　同
草引いて今日お別れにならうとは　たつの　三木その女
青葉木菟別れの夜も庭に来て　同
草若葉お別れはまだしたくなく　同
神の手をこぼれて滝の落つるなり　熊本　岩岡中正
音たてて立夏の水となりにけり　同
桐の花晩年さして遠からず　同
快晴に始まつてゐる子らの夏　芦屋　黒川悦子
ラベンダー空まで続く丘に立つ　同
一束のラベンダーの香と帰路につく　同
虚子偲ぶ同窓会や明易し　京都　安原　葉
年一度語る消息明易し　同
この会にもらひし元気明易き　同
万緑発万緑行や山のバス　奈良　古賀しぐれ
一山の梅雨霧一村を閉す　同
山国の木霊の宿る句碑涼し　同

光るまで待つて飛ぶまで待つ蛍　香川　湯川　雅
水馬水に囲まれゐる自由　同
旅先の下闇に潰されにゆく　同
たかんなの掘り頃といふ見えぬもの　東京　河野美奇
たかんなの一ト夜の丈に雨雫　同
竹の子の育つ雀のお宿かな　同
待つ日々のたちまち残る花の日々　龍ケ崎　今橋眞理子
行春や任地へと子を見送りて　同
春宵の灯色へ移る丸の内　同
文塚の闇を抜け来し夏の蝶　神戸　山田佳乃
蚕豆の荷の緒のほのと湿りたる　同
蕗の葉は太古のままに山の雨　同
梅雨曇大河の光奪ひけり　八尾　山下美典
黒南風に落着きのなき風見鶏　同
波音も無く夏潮の浜に寄す　同
大空へ色の音階立葵　東京　橋本くに彦
空こぼしまだ整はぬ木下闇　同
櫂の音つぎづぎ乗せて夏の川　同
一族の盛衰ここな夏潮に　同　今井千鶴子
代々の萱葺屋根に蜘蛛と住む　同
目も鼻もなくて蚯蚓の真暗がり　同
噴水のアールデコより立ち上る　宝塚　水田むつみ
噴水の律義に刻を繰り返す　同
行跡のなき身軽さも水馬　同

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（九月号より）

むつみ・眞理子・保　佳
憲　明・千鶴子・美　奇
静　龍・中　正・葉
とほ歩・廣太郎

うつくしきもの咲き満ちて百千鳥　たつの　浅井青陽子

浅井青陽子様は残念ながら五月十三日にご逝去、ご冥福を祈ると共にその業績とご長寿を称えるばかりである。百一歳でなお相談役としてご活躍、経済界は勿論たつの市の文化発展に貢献され、たつのになくてはならないお方だけに惜しまれる。

この句には、たつのの美しさを賛美し、自然をこよなく愛した作者の為人が滲み出ている。小京都とも言われ山紫水明の美しい町を心から守って来られた。玲瓏たる鶏籠山からの鳥語を楽しみ、聚遠亭の四季を詠む姿はまさしく咲き満ちた「うつくしきもの」に囲まれた俳人そのものである。楽園の百花と百千鳥に包まれ幸せな日々を送る作者を彷彿とさせる一句である。（むつみ）

ひょっとすると、この御投句が作者自身最後のホトトギスへの御投句になるかも知れない。御存知の通り、平成二十三年五月二十三日、満百一歳の生涯現役としての人生を終えられた。仕事を愛し、何よりも俳句を愛した人の、この上もない自然讃歌として、永遠に残る作品である。（廣太郎）

魔法派と科学派のぬて蜃気楼　神戸　藤井啓子

「海底の蜃が気を吐いて空中に楼閣を現す」これは、魔法派の考え方だろうか。かたわらで、科学派が光の屈折について説いているのかも知れない。蜃気楼を前にさまざまな談義が交わされているのであろう。そのどちらにも耳を傾けて蜃気楼をながめている作者。対比が蜃気楼の謎を語っている。（眞理子）

砂漠等でよく見られる「蜃気楼」は、日本では四月に・富山県魚津市でよく見られるそうであるが、筆者は未だ実際には見た事がない。一見不思議な現象ではあるが、科学的にはほぼ解明されているとも聞く。しかしロマンチックな側面の方が、季題として相応しいだろう。そんな微妙な魅力のある句。（廣太郎）

（以下略）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

汀子選

惜春の瓦礫の中に探す物　仙台　赤川誓城
身一つの災禍に八十八夜かな　同　同
日に解けてゆく朝桜あさざくら　東京　稲畑廣太郎
桜にはやつぱり青空が似合ふ　同　同
俯きて咲く黄桜を人仰ぐ　京都　安原　葉
風船も逃げて疲れし家路かな　同　同
山眠るてふ哲学に入りにけり　大阪　蔦　三郎
山笑ふより下りて来て渓唱ふ　同　同
父の日やもう父のなき娘たち　東京　今井千鶴子
木洩日に涼しからむと遥かより　同　同
初花の一つの何と誇らしく　相模原　木村享史
天心に日の移りても花の冷　同　同
まづひかる高木の梢や朝桜　橿原　稲岡　長
何事ぞ象の真紅の落椿　同　同
吟行の摘みたきときは草をつむ　熊本　岩岡中正
水辺ゆくとき惜春の人となる　同　同
梅雨の山なきがごとくにありにけり　明石　中杉隆世
蛍火のいのちの川となりにけり　同　同

住吉の歌神宿る木下闇　奈良　古賀しぐれ
蛇の衣住吉さんの松に脱ぐ　同　同
瑞枝より光こぼれて風五月　箕面　井上浩一郎
峡深き雨の烟らす花棟　同　同
森の抱く梅雨じめりてふ大地の香　神戸　長山あや
かきつばた雨意は空より地にひそむ　同　同
堂々とよぎる片羽蟻のもの　東京　橋本くに彦
欲張りて獲物入らぬ蟻の穴　同　同
余花ふぶき止まざる渓の深きこと　同　河野美奇
雨の余花濡るるを忘れ仰ぎをり　同　同
切株を立つ吾に蝶も立ちにけり　熱海　嶋田摩耶子
柳絮払ひつつの読書や芝にゐて　同　同
渋滞をさけて天城路山桜　同　嶋田一歩
渋滞のとけ下田着鯉幟　同　同
能面を一歩出でたる壬生の面　神戸　後藤比奈夫
これがその空飛ぶ鶴の壬生の面　同　同
木木の葉音重奏となる梅雨の森　吹田　宮﨑　正
梅雨寒し森の奥へと渡る鐘　同　同

PDF= 俳誌の salon

天地有情句評

汀子

惜春の瓦礫の中に探す物　仙台　赤川誓城

東日本大震災に於ける悲しみの一齣。

日に解けてゆく朝桜あさざくら　東京　稲畑廣太郎

新鮮な朝の桜から始まる一日。

俯きて咲く黄桜を人仰ぐ　京都　安原　葉

黄桜への人々の関心の情。

山笑ふより下りて来て渓唱ふ　大阪　蔦　三郎

春の息吹の山と渓。

父の日やもう父のなき娘たち　東京　今井千鶴子

父の日の娘たちへの作者の感慨。

初花の一つの何と誇らしく　相模原　木村享史

先ず綻びた桜の一花。

まづひかる高木の梢や朝桜　橿原　稲岡　長

太陽の一閃を受け止めた朝の桜大樹。

吟行の摘みたきときは草をつむ　熊本　岩岡中正

心の赴くままにあるのが吟行。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon